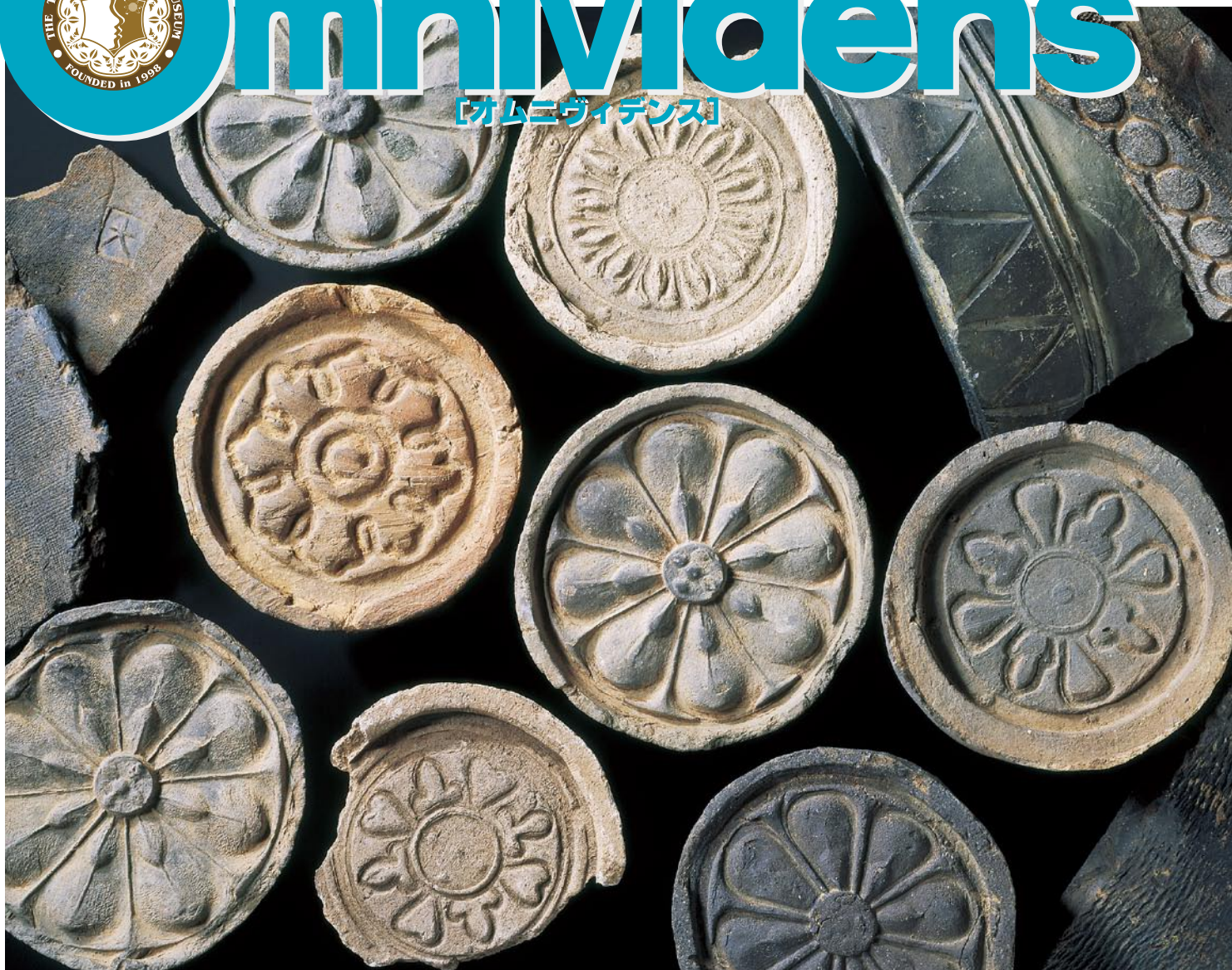




omnividens

【オムニヴィデンス】



陸奥国分寺跡出土の瓦

国分寺は天平13年(741年)に聖武天皇の詔勅により、全国60余国に建てられた国立の寺院。陸奥国分寺は仙台市若林区木ノ下に所在する日本最北の国分寺である。1955～1959年に東北大学文学部伊東信雄教授を調査担当者とする学術発掘がおこなわれ、金堂、塔、講堂、僧坊跡等の壮大な伽藍配置が明らかとなった。また、ここから発見された古瓦類の研究は東北古代史の解明に大きく貢献した。写真の丸い瓦は軒先のいちばん端に付ける装飾的な瓦で軒丸瓦と呼ばれる。模様には製造時期によりいくつかのタイプがある。直径は20cm程度。写真下は創建期の重弁蓮華文軒丸瓦を斜め横からみたところ。撮影：菊地美紀



2008.4 **27**
NO.

耕さぬ土地のカルティヴェイションと集合的記憶

2008年3月5日から14日にかけて、財団法人カメイ社会教育振興財団の助成をうけてアメリカ合衆国の博物館を
実地調査しスタッフと意見交換をする機会を得た。参加者は島本昌憲、佐々木 理、阿見孝雄、小川知幸の4名。訪問都市
はロサンゼルス、ピッツバーグ、ワシントンDCの3都市にわたり、視察対象は6つの博物館に及んだ。報告は前・後篇に
わけ、今回はロサンゼルス篇をお届けする。(文・写真：小川知幸)

赤茶けた土地と灰色の土地

機上の人となり10時間が経った。ほうぼ
うの窓際から白色の陽光が洩れ始める。目
が慣れるにつれて、森林とも荒地ともつ
かない赤茶けた途方もない大地が窓外に
広がっていることに気づいた。ロサンゼルス
である。この人の手にあまる規模の大きさ
には、空港からダウンタウンに向かう車中
でも圧倒された。天を突くビルの林立する街並
みは、まさに巨神の遺跡であり、そのなかを
行き交うわれわれは、仕切り壁と道路をち
まちまと作ってようやく人間のサイズを手
入れた侏儒にすぎない。



ロサンゼルスは人口約385万人、全米で
第3位の大都市である。周辺諸都市を含め
た大都市域はグレーター・ロサンゼルスとも
呼ばれ、関東平野にも匹敵する面積をも
つ。サンタモニカやパサディナ、ロングビーチ
はよく知られているが、それらは巨大化を続
けるダウンタウンの生活に嫌気がさした人び
とが作り上げた郊外の中核都市である。仕事
も買い物も各々の町ですませられるよう
になると、彼らはダウンタウンに出てこなく

なった。ビルの底を歩く人びとの姿は、夜間
には不思議なほどに消え去ってしまう。

内側の記憶

われわれが向かったロサンゼルス郡立自
然史博物館も、やはりダウンタウンの周辺
域にあった。およそ3300万種の標本を所
蔵する、西海岸でも屈指の博物館とのふ
れ込みである。DASHという驚くほど飛ば
す路線バスに乗って十数分。南の郊外に
放り出されたわれわれは、素っ気ないコン
クリートの壁に覆われた博物館を見上げて
いた。出迎えは、勇ましいティラノサウルスと
トリケラトプスの実物大造形モデルである。



しかし正面玄関をくぐると、内部はいわば
宮殿であった。スペイン・ルネサンス様式
と思われる建築様式を採り入れた、円柱と
丸天井。そのロンドラ(円形大広間)には、
今し方出会ったばかりの恐竜たちが骨格と

なって鎮座している。だからこの宮殿のある
じは人間ではなく恐竜なのである。われわ
れはこうして二重の意味で内部へと入っ
た。博物館のコンクリート壁の内側は、人び
との歴史の「記憶」であり、その「文化」の
中心にあるのは、掘り出された恐竜の骨で
あった。

歴史と自然

博物館の中核となる部分は1913年に
竣工した。以来増改築を繰り返し、現在の
建物は地下1階・地上2階である。そこに北
アメリカの恐竜、ほ乳類、鳥類、海洋生物、
新生代の化石、宝石と鉱物などが展示さ
れており、収蔵標本は45億年の歴史を網
羅すると謳われている。ただし展示資料は
オリジナルではなくレプリカが多いという印
象を受けた。実際に発掘資料を所蔵して
いても、それらを市場に出さないこととい
わゆるレプリカ・ビジネスを潤わせるという事情
もあると聞いた。

しかしそれでも、ジオラマを中心としてほ
乳類の展示は充実しており、薄暗い宮殿
の壁にあたかも大きな窓があいているか
のように、森林や砂漠や雪原のなかで大小
の野生動物たちの織りなす情景がいくつも
再現されていた。このジオラマ作りは自然
史博物館の伝統であり、これを基準として





それぞれの博物館の展示に対する取り組みを推し量ることもできる。郡立自然史博物館ではジオラマに簡潔な解説をつけたり触れることのできる部分を作ることで、時間と空間を超えて野生に親しめるよう工夫されていた。だがそれは本来、人間が触れえぬものとしての自然への崇敬である。

生きられた過去

父親が巨軀をかかめて、小さな娘にはく製の説明をしている。恐竜の骨格標本や巨大海洋生物の水槽の周りには、授業の一環なのだろう、引率の先生に連れられた小学生たちがにぎやかに走り回っている。しかし、われわれが次に足を運んだ地階の歴史展示室は、ひっそりと静まりかえっていた。カリフォルニアのはじまりから現代にいたるまでの歴史資料を陳列した、広大な展示室である。カリフォルニアの歴史は1848年に米墨戦争(アメリカ・メキシコ戦争)の



結果、メキシコが敗戦し、合衆国に譲渡されたときに始まる。同時にいわゆるゴールドラッシュが始まり、さらに大陸横断鉄道の開通によって大規模な人口流入が起きた。1850年にわずか1600人あまりであったロサンゼルス的人口も、1900年には約10万人、1950年には197万人にまで達した。また油田が発見され、ポール・ゲッティという石油王を生んだ。市内には広軌の高速鉄道が走り始め、馬車に代えて人びとの足になった。年に数日しか雨が降らないという恵まれた気候から、北西部には映画の都ハリウッドが形成された。

米墨戦争からディズニーの撮影資料にいたるまで、金鉱脈の掘削の道具やその様子を写した拡大パネル、高速鉄道の車両、道路舗装用大型機材、郵便飛行機の模型、新聞印刷機などの資料群がそこにはあった。およそ一瞥すればカリフォルニアの歴史の特徴が飲み込める。しかしまるでパズルのピースを散らしたように、何か歴史の一部を切り取って雑然と配置したようにもみえた。そして、人気がなかった。

集合的記憶

歴史に対する価値観の相違にもよるのだろう。共通の歴史の不在、あるいは人びとの集合的記憶のある場所の違いといってもよい。後日サンタモニカ近くのゲッティ・センターや、リトルキョーの全米日系人博物館を訪れたときに、われわれはそうした思いを強くした。サンタモニカ湾を望む白亜の美術館で、富豪が収集した数々の美術品を眺めたとき、あるいは第二次大戦下で、強制的に収容された日系人がわずかに携行を許された草トランクが山と積み上げられて



いる展示をみたとき、われわれは、人びとがそれぞれ異なる集合的記憶をもっており、歴史に対して投げかける視線は決して交わることがないと知った。しかし、それだからこそ、共通の記憶が必要だったのではないか。そしてそのために選ばれたのが自然史であった。カリフォルニアの、ひとの耕さぬ土地を耕すため、歴史のない土地に文化を築くために(cultureには「耕す」という意味がある。その名詞のcultivationは耕作・教養の意)、「われらの」土地で生み出したもの、その最たるものが恐竜の骨だったのであり、それをあたかも生きているかのように体験することが、人びとには重要であったのである。

スミソニアン篇に続く



「ミュージアムトーク2008 ロック アンド フォッシル」を開催いたしました。

総合学術博物館では、平成19年度公開講座として、平成20年2月16日から3月15日までの毎週土曜日に、東北大学自然史標本館において、「ミュージアムトーク2008 ロック アンド フォッシル」を開催しました。今回の公開講座では、展示中の岩石や化石標本を間近に見ながら、その由来や学術的な履歴について語ることを主旨として、ミュージアムトークという型式をとりました。講演者と受講者との距離を近く感じてもらうために、少人数での開催を企画しましたが、いずれの回も募集人数を上回る応募があり、お申し込みをお断りさせていただくこともございました。以下に講演内容の要旨を掲載いたします。

第1回(2008年2月16日) 「文学を旅する地質学」

東北大学名誉教授 蟹澤 聰史



初回は、長年にわたり東北大学理学部で岩石の研究をされてこられ蟹澤聰史名誉教授にご講演をいただき、前半は文豪ゲーテと地質学に関わる内容でお話いただきました。ゲーテはGoethite(針鉄鉱)として鉱物に名を残しているように、意外にも地学との関わりが深いのです。それは著書『イタリア紀行』にも強く現れており、1785年のベスビオ火山の噴火の記録、白榴石と思われる鉱物の記載など、イタリア各地の地質学的・鉱物学的観察を行って、同書は完成されたとのことでした。後半は童話作家で有名な宮沢賢治と地質学にまつわるお話でした。宮沢賢治の作品にはさまざま

な鉱物が登場しており、宮沢賢治は青い石、青い鉱物が好きだったというエピソードを紹介されたあと、そこに登場する青い石の実物をみなさんに披露されました。

第2回(2008年2月23日) 「矢部長克の買い物籠」

総合学術博物館准教授 佐々木 理



約100年前の1907年から5年間、矢部長克は東北帝国大学地質学教室の開設準備のためにドイツに留学しています。1912年に帰国した矢部は、教室開設のために、たくさんの教育用標本や古生物学研究のための資料を欧州より輸入しました。1900年のパリ万国博覧会には、日本人技術者によって完成された1/100万日本帝国地質図が展覧されました。この地質図は、日本の地質学が外国人教師による教育期間を修了したことを示す卒業作品ということが出来ます。矢部が欧州で過ごした時期は、独り立ちした日本地質学が新しい発展の方向を模索していた時期でもあったのです。

自然史標本館展示室のジュラ紀と白亜紀のコーナーに展示されている欧州産アンモナイト標本には、1912年当時のロンドン、パリ、ボンで活動していた標本商のラベルが貼られています。このような標本は、世界中の大学や博物館の標本コレクションで見ることができます。当時、地質学技術者に対する需要は高く、その養成機関の設立がひとつのブームとなっていました。これらのラベルは、東北大学地質学教室の設立もその世界的なブームの一環であったこと

を示しています。そこで、自然史標本館に保存されている当時の帝国大学物品購入台帳をもとに若き矢部が購入した標本、あるいは購入しなかった資料を手がかりとして、彼が新しい大学で展開しようとした地質学について考えてみました。

講演では、欧州産アンモナイト標本と地質学の誕生と発展、ドイツ・ゾルンホーフ産始祖鳥化石のレプリカ標本の偽造論争と羽毛恐竜の発見、ドルビニー有孔虫模型と微古生物学の発展、また、地球の年齢についての論争を紹介し、イギリスの地質学者アーサー・ホームズによる岩石の地球年齢の推定の地質学史的な意義について考察を試みました。

第3回(2008年3月1日) 「生物の進化と種のつながり」

総合学術博物館准教授 島本 昌憲

現在、地球上には150万あるいはそれ以上と推定される数の生物種が知られています。これらの生物種は35億年以上におよぶ生物の歴史の中で単調に増加してきたわけではなく、何度も繰り返された大量絶滅とその後の適応放散の結果として今にいたっています。この間の地球環境変動は地球全体が氷に閉ざされるほどの寒冷期から全球的に氷が消滅するほどの温暖期に及んでいます。このような環境変動の中で生じた生物の進化について、われわれはどのように認識し捉えてきたのでしょうか。

1758年に『Systema Naturae(第10版)』を著したリンネは、生物種の名前(学



名)を属名と種小名の組み合わせによって示す二命名法によって整理し、生物界にみられる形態要素の基本配置の類似性にもとづく階層構造を見出しました。これにより、生物には形態の類似するいくつかのグループが認められ、それぞれのグループはさらに大きなグループにまとまるような構造になっていると考えられました。しかし、リンネの時代にはこのような階層構造がなぜ認められるのかについては十分な説明はできませんでした。

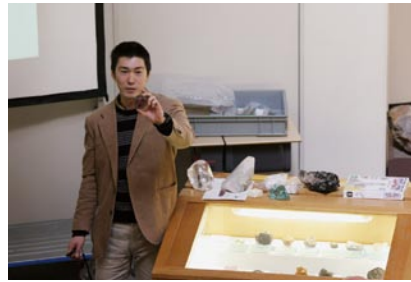
この点について新たな視点が導入されたのは、ダーウィンが『種の起源』を発表した19世紀の後半に入ってからです。ダーウィンは長い時間のあいだに生じる生物の変異と自然淘汰の結果、生物は先祖種からより適応的な子孫種に変化し、それらの結果によって共通の先祖種から派生した子孫種どうしは互いによく似通っており、形態の類似性が高い生物種はより近い過去に共通先祖から種分化した近縁種であると捉えました。こうして、生物は時間と共に変化し、先祖種から子孫種が派生する過程で形態的に変化して、リンネが指摘したような階層構造が生じると考えられるようになりました。

しかし、ダーウィンの時代にはまだ生物種間の類似性を説明する遺伝の実体に関してはほとんど解明されておらず、その解明については20世紀の半ばまで待たねばなりません。1953年にワトソンとクリックにより「DNAの二重らせんモデル」が提唱され、DNAに記録された塩基配列が遺伝暗号となって次世代に伝わるという遺伝子の正体が明らかとなり、最近では遺伝情報にもとづいてたくさんの生物種間の系統関係(先祖-子孫関係)が推定されるようになりました。

こうした結果、現在では38億年にわたる多様な生物界の大まかな歴史的变化や人類の起源など、生物の種間関係や生物進化の過程を具体的に理解することが可能となりました。現在地球上に生息する生物は互いに結びつけられる系統関係を有しており、どの生物種にも必ずその先祖種を見出すことはできますが、その一方ですべての生物種が子孫種を残すことができるという保証はありません。われわれ人類もその例外ではなく、今後生じるであろう環境変動と偶然という運命のいたづらをくぐりぬけてどのように生存し続けられるかを考えることは将来の重要な課題のひとつと思われます。

第4回(2008年3月8日) 「水晶あれこれ」

総合学術博物館准教授 長瀬 敏郎



鉱物の研究は、「水晶に始まり水晶に終わる」ともいわれています。それほど水晶は学術的に面白く、また複雑でむずかしいものです。水晶の学名は石英(Quartz)であり、そのなかでも平面で囲まれた外形をもつ美しいものをわれわれは水晶と呼んでいます。石英は、火成岩や変成岩などの岩石の中にはもちろん、海の砂や土壌などわれわれの周りにも普遍的に存在する、もっとも身近な鉱物のひとつです。水晶は、ほぼ純粋なSiO₂という単純な化学組成をもつわりには、その結晶構造は複雑です。また、いろいろと変わった性質や特徴をもつのもこの水晶です。今回のミュージアムトークでは、このいろいろな変わった特徴をもつ水晶についてお話しました。アメジストやシリンなどは色の違いによって呼び名が変わります。これらの色の違いは、ほんのわずかな含まれる不純物によるものです。また、2つの結晶がある決まった関係で接合したものを双晶と言い、水晶にはおもに日本式双晶、ブラジル双晶、ドフィーネ双晶があります。双晶をしたものは、単結晶とは違った形態的な特徴が現れます。この他に断層でできたといわれるフェーデン水晶や面の中央部に凹みのあるウインドウ水晶など、両方に鍾面が現れる両鍾水晶など、水晶にはさまざまな形態があることを紹介しました。後半では、水晶はどこで採集できるかについて触れ、とくに大型の黒水晶を産出する晶洞型のベグマタイトとして岐阜県苗木を、また日本式双晶の産地として世界的に有名な山梨県乙女鉱山などを紹介しました。

第5回(2008年3月15日) 「北上山地のアンモナイト化石」

総合学術博物館館長 永広 昌之

アンモナイトというと、北海道産の美しく巨大なアンモナイトを思いうかべることが多

いのですが、北海道からは白亜紀後期というごく限られた年代のものが知られてにすぎません。一方で、北上山地は、デボン紀から白亜紀までのすべての時代のアンモナイトを産する日本で唯一の地域です。岩手県の通称粘土山から1990年に発見されたデボン紀後期のクリメニア類は、わが国最古で唯一のデボン紀アンモナイトとなっています。

北上山地からの石炭紀アンモナイトの報告は比較的少ないのですが、ペルム紀アンモナイトに関してはまさに“宝庫”といえます。前期ペルム紀アンモナイト2属、中期のもの19属、後期のもの12属で、わが国全体から知られている属が前期6属、中期25属、後期12属であるのをみれば、北上山地がペルム紀アンモナイト研究においていかに重要な地域であるかがわかるでしょう。

北上山地の中～後期ペルム紀アンモナイトは典型的な熱帯帯アンモナイトであり、この時期の北上山地(南部北上帯)が赤道域に位置していたことを示しています。前期三畳紀のアンモナイトも同様です。日本産アンモナイトの科学的研究は、石巻産三畳紀アンモナイトをモイソヴィッチ(1888年)が新種記載したことにはじまります。また、仙台東方の利府地域は、仙台にもっとも近い、古くから知られた中期三畳紀のアンモナイト産地です。ジュラ紀のアンモナイトも豊富で、白亜紀では初期のものが北上山地南部から、前期の後期および後期のものが北部から知られています。

これまで北上山地から多くのアンモナイトが報告されてきたのは、明治の近代地質学の揺籃期以降の、東北大学を中心とする北上山地における永年の研究の歴史を反映しているといえるでしょう。現在も資料は増加しつつあり、さらなるアンモナイトの発見や資料の掘り起こしが、研究を発展させることと期待されます。



Study Nature, Not Books



東北大学
総合学術博物館
館長
永広 昌之

PROFILE
(えひろ まさゆき)
1947年生まれ
専門：テクトニクス、
古生物学
(古生代アンモナイト)

自然を学べ、 書物にたよるな

タイトルの言葉は、私の小学校時代の恩師、岩根 晋先生の座右の銘で、教室正面の黒板の上に「自然を学べ、書物にたよるな」と大書した紙が、黒板の幅いっぱいには張られていました。先生は生物学がご専門で、「ある科学者の言葉です。自分でよくものごとを見て、考えることが大切です」という先生の言葉はずっと私の心の奥にとどまっていたように思います。私がフィールド・ジオロジスト(野外地質屋)として今もフィールドワークを続けているのも(最近あまりできないが)この記憶が影響しているのかもしれませんが。しかし、恥ずかしながら、この言葉が私たちにも関係の深いルイ・アガシー(Jean Louis Rodolphe Agassiz : 1807-1873)のものであったことを知ったのは、小学校卒業後40年以上たった、つい数年前のことでした。

アガシーと ハーバード大学博物館

アガシーは魚類学者であり、また、博物学者でもありました。私たちの世界では、第三紀の地層から産出するサメ化石カルカロドン・メガロドンの命名者として有名です。カルカロドン・メガロドンは、体長が10mをこえる巨大鯨で、現代の“人食いザメ”ホホジロザメの倍以上の大きさがあります。その歯はこどもの手のひらサイズで、多くの化石採集家が探し求める対象となっています。また、しばしば、“天狗のツメ”として神社のご神体とされていることもあります。宮城県南部の

約1000万年前の地層からはこの歯の化石が数多く産出し、全国の採集家のあいだでは知らぬ者がいないほどです。

さて、上記の言葉がアガシーのものであることを私が知ったのは、数年前ハーバード大学博物館を訪れた時でした。訪問の下調べをしていたところ、まずはアガシーがこの博物館の創始者であること、そしてアガシーの有名な言葉として“Study Nature, Not Books”があることがわかり、恩師の姿を久しぶりに思い出しました。また、ハーバード大学も身近な存在となりました。

自然=実物の重要性

古生物研究の世界でも最後は標本が重要で、論文の記載だけではわからないこともたくさんあります。ある種を決めるのは世界でたった1個のホロタイプ(完模式標本)です。東北大学総合学術博物館(理学部自然史標本館)には何百というホロタイプが保管されていて、国内だけでなく国外からも研究者が比較調査のため訪れます。「百聞は一見にしかず」も有名なことわざですが、書物には通常“百”ものデータは示されていません。また、論文の筆者により選別されたものしか載っていませんから、自然や標本を直接観察すること、とくにさまざまな視点から見直すことは、研究対象の中に



創立者アガシーを記念するプレート(ハーバード大学博物館：磯崎行雄氏提供)

ひそむ重要な情報を掘りおこし、活かす上でも重要でしょう。また、巨大ザメ化石を追い求めることも私たちも、なかなか得られぬ探索の実践の中で、どのようなところを探せば化石を得ることができるか、古生物(過去の生物)はどのように化石となるのかを学んで行きます。

ハーバード大学博物館は第一級の豊富なコレクションをもち、その広いとは言えない展示室は、こどもたちだけではなく一般の観覧者でもにぎわっていました。しかし、そこでも、わが国と同じように、中・高校生世代の姿が少ないように思えます。博物館は手軽に「自然を学ぶ」ことができる場所でもあります。そこをどのように活用するのか、教師と博物館とのより密接な連携が必要でしょう。



ラダックヒマラヤ、チャン峠北方(標高約4,900m)にて

東北大学総合学術博物館 I n f o r m a t i o n



東北大学サイエンスカフェで永広館長が講演



サイエンスカフェ会場の様子

「東北大学サイエンスカフェ」は、せんだいメディアテーク1階のオープンスクエアを会場に、毎月1回のペースで開催されています。2008年2月22日の第31回サイエンスカフェでは、当館館長の永広昌之教授が「アンモナイトが語る大陸移動～古生物地理のロマン」と題した講演を行いました。

当日は、小学生から社会人まで幅広い年齢層の方々が集まり、永広教授の語るアンモナイトを材料とした「スロー・サイエンス」

の話に熱心に耳を傾けていました。

講演では、アンモナイトはどのような生物であったかを紹介した後、永年蓄積されてきた北上山地のペルム紀・三畳紀アンモナイトをおもな研究材料として、アンモナイト研究によって何を知ることができるかが説明されました。

各テーブルには、理学部・理学研究科の学生・院生がファシリテーターとして付き、講演終了後に聴衆の皆さんとの議論を通じて、質問を取りまとめました。質問には、「なぜアンモナイトは絶滅したの?」とか、「アンモナイトの縫合線が複雑になる理由は何?」など、明確には回答しにくいものもありましたが、永広教授のユーモアを交えた回答を聞くことで、さらに理解を深めることができたと思われま

す。講演には100名程度の方にご参集いただき、また20名ほどのファシリテーターの皆さんにご協力をいただきました。皆様に厚く御礼申し上げます。



ファシリテーターとの議論



難しい質問に悩む(?)永広館長

東北大学古人骨コレクションが移管されました

遺跡の発掘調査現場では、当時の人びとの遺骨が発見されることが少なくありません。このような遺骨のなかでも、筋肉や内臓などの軟部組織が分解し、骨格のみが残ったものを、古人骨と呼びます。東北大学には、東北地方を主体とした縄文時代から江戸時代にかけての遺跡から出土した、約500個体もの古人骨資料が保管されています。その多くが、この度、医学部から総合学術博物館へと移管されました。

このコレクションは、以下の4つの時期にわたって収集されたものです。

第I期(1910年代から1930年代)：理学部地質学古生物学教室の松本彦七郎によって、東北地方を中心とする各地の遺跡や海外から収集された資料。

第II期(1940年代)：医学専門学校時代の解剖学教室に所属していた大場利夫の発掘調査による、七ヶ浜村(現塩竈市)清水洞穴の一括出土資料。

第III期(1970年代後半から1990年代前半)：札幌医科大学解剖学第二講座において収集された古人骨資料のうち、東北地方出土の標本のみを東北大学に移管したものの。

第IV期(1990年代後半以降)：医学部解剖学第一講座(現人体構造学分野)において、東北地方各地の自治体等の要請に応じて収集された資料。

これらの古人骨は、当時の人びとの体格や容貌を知る直接の手がかりとなるばかりでなく、生前の生活習慣や病氣・ケガなど

の状況を探るにあたって重要な情報を提供してくれます。また、日本列島に住む人びとの成り立ちを考える上でも有用な資料といえます。最近では、その形態を計測や観察によって分析するという従来の方法に加えて、骨に遺されたミトコンドリアDNAにもとづく系統解析や、コラーゲン中の安定同位体の構成比によって当時の食性を明らかにする研究も進められています。

また、筋肉や皮膚の厚さの解剖学的データをもとに頭蓋に肉づけし、生前の容貌を推定復元する研究も行われています。



東 北 大 学 総 合 学 術 博 物 館
I n f o r m a t i o n



自然史標本館(総合学術博物館)
2007年度入館者1万人目に記念品を贈呈

総合学術博物館が共用する理学部自然史標本館の年間入館者(2007年度)が3月23日(日)に1万人をこえました。総合学術博物館では今年度1万人目の入館者にささやかな記念品を贈呈することとし、この

日を待っていました。

1万人目は、来年度の東北大学受験のため下見をかねて栃木県からご家族3人で来仙された、岸 香織さんとご両親です。香織さんには、永広館長から記念品の化石・

鉱物セット(マダガスカル産白亜紀アンモナイト*Desmoceras*およびブラジル産紫水晶)が贈呈されました。



理学部自然史標本館

●ご利用案内

総合学術博物館の建物については現在建設設計途中ですので、理学部自然史標本館を共用しています。下記は理学部自然史標本館のご利用案内です。

●入場料

大人150円/小・中学生80円
(団体は大人120円、小・中学生60円)
幼児・乳児は無料、団体は20名以上です。

●開館時間

午前10時から午後4時まで

●休館日

毎週月曜日(月曜日が祝日にあたる場合はその翌日とします)
年末・年始(12月28日から1月4日)
館内保守点検のため臨時に休館することがあります。



総合学術博物館のホームページもご覧下さい。



東北大学総合学術博物館のホームページ
<http://www.museum.tohoku.ac.jp/>

東 北 大 学
総 合 学 術 博 物 館
THE TOHOKU UNIVERSITY MUSEUM

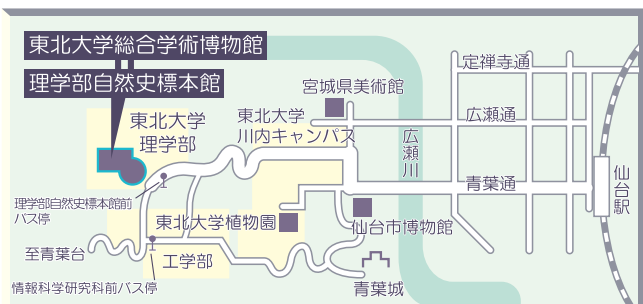
〒980-8578
宮城県仙台市青葉区荒巻字青葉6-3
tel/fax.022-795-6767

© The Tohoku University Museum



[オムニヴィデンス]

Omnividensはラテン語で、英語のall-seeingに相当し、「普く万物を観察する、見通す」の意味をもっています。



●交通手段

仙台駅西口バスプール
9番乗り場
所要時間約15分
料金220円

- 青葉通・理・工学部先まわり動物公園循環 理学部自然史標本館前下車 徒歩1分
- 青葉台または宮教大または成田山行き 情報科学研究科前下車徒歩4分
- 仙台市観光シティーバス「るーぶる仙台」も利用できます



この印刷物は適切に育まれた森から生まれたFSC認証紙と環境にやさしい植物性大豆インキを使用しています。